

# 系来渡が大半の骨人弥生

## DNA分析 後期、盛んな交流

鳥取市青谷町の青谷上寺地遺跡で見つかった弥生時代後期の人骨について、県埋蔵文化財センターや国立科学博物館などが実施しているDNA分析調査の中間報告会が17日、同町の市青谷町総合支所で開かれた。大半の人骨のルーツが大陸からの渡来系だったといい、同博物館の篠田謙一副館長は「日本人の成り立ちを知る重要な手がかりだ」と話す。

(河合修平)

## 遺跡 地寺上谷青

遺跡からはこれまでに約5300点の人骨が出土。調査では、頭蓋骨約40点が微量の骨を削り取り、DNA

分析を行って報告会では、母から子へ受け継がれるミトコンドリアのDNA配列を分析し、母系

の祖先をたどった調査結果を篠田副館長が説明。市民ら約130人が聞き入った。

篠田副館長によると、九州北部の遺跡から出土した弥生前期の人骨の分析では、在来の人骨と渡来系の人骨が見つかった。当時の人が両方の祖先を持っていたことを示しており、青谷上寺地遺跡の人骨についても、両方の遺伝子が検出されると予想していたという。しかし、今回DNAを抽出した人骨32のうち、31点が渡来系で、縄文系は1点だけ。DNAの型は29種類に分かれ、血縁関係がほとんどないことも分かった。

青谷は遺跡の発掘調査から、大陸などとの交易拠点だったと考えられており、分析からも、多くの渡来人が入ってきて、交易で栄えていたことがうかがえるという。また、従来の研究では、稲作の普及や定住生活の広がりによって弥生後期

には日本人の中に渡来系と縄文系が交ざっていたと考えられていた。しかし、今回の調査結果は定説に当てはまらず、篠田副館長は「これまでの説について発展的に考える契機になる」と述べた。

共同研究では今後、細胞核のDNAから父系のルーツについても分析する。2019年3月には、鳥取市内で最終的な研究成果を発表する予定で、篠田副館長は「当時の人々がどのように暮らしていたのかを明らかにしていきたい」。報告

を聞いた同市の会社員宮川昌樹さん(64)は「青谷でどんな人が暮らし、自分たちのルーツはどこにあるのか、興味をかき立てられた。研究内容に注目したい」と語った。

同町の青谷上寺地遺跡展示館では17日、研究に用いられている人骨5点の展示も始まった。午前9時〜午後5時。月曜、祝日の翌日は休館。無料。終了日は未定。問い合わせは同展示館(0857・85・0841)。



① 研究の成果について報告する篠田副館長(右)、鳥取市青谷町で② DNA分析に使われている弥生時代の人骨。青谷上寺地遺跡展示館で展示が始まった

しめるイルミネーション (南部町で)

